

Title	昭和六二年度 三田史学会大会のご案内
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1987
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.57, No.2 (1987. 9)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19870900-0170

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

昭和六二年 三田史学会大会の御案内

左記により本年度の大会を開催いたしますので御案内申し上げます。

会員各位殿

昭和六年九月一〇日

三田史学会
会長 村山光一

記

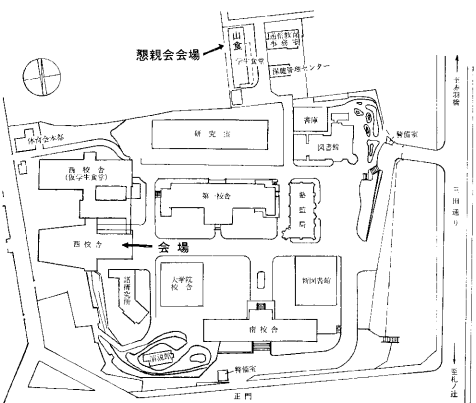
- 一、期 日 昭和六年二月二四日(土)
- 二、会 場 東京都港区三田二一五―四五 慶應義塾大学
- 三、行 事 大会プログラムの通りです。
- 四、参加資格 特にごさいませんので自由にご参加ください。ただし、懇親会等の出欠につきましては、同封書にて海連絡願います。
- 五、懇親会費 五〇〇円(学生・院生 三〇〇円)当日、総合部会場にて御納入願います。

昭和六二年 三田史学会大会プログラム

研究発表

- 開会部会(九・三〇～一二・〇〇) 西校舎五二番教室
- 1 日本古代の祈雨祭祀について
 - 2 近江六角氏の領地支配について
 - 3 『続日本紀』天五年八月辛亥条「天竺臨開始遣使」について
——平城宮平面構成との関連から——
 - 4 今昔物語集大蔵官人説話について
- 東洋史部会(九・三〇～一二・〇〇) 西校舎六一番教室
- 1 明末福澤翁の民衆について
 - 2 「社説」のレトリックについて
 - 3 サフツワイ朝シャーマン・スーイ世の地方政策とギョーラン州
——折廻大学講師
 - 4 ゼボグと近代文学
- 西洋史部会(九・〇〇～一二・〇〇) 西校舎六一番教室
- 1 スキタイの定住化プロセスについて
 - 2 一四世紀に始まる義士同盟組合(Corporation)の結成と組織化についての考察
——慶應義塾大学(大学院修士課程) 岩谷なつ子氏
 - 3 一九世紀後半のイギリス社会とラファエル前派運動
——慶應義塾大学(大学院修士課程) 秋葉 知子氏
 - 4 ポリネシアにおけるヨーロッパ人・コンタクト
——ラクトンガ島の伝説的資源巡遊に対するヨーロッパ人支配の影響——
——慶應義塾大学(大学院修士課程) 内田 雅美氏
 - 5 第二次大戦における赤十字国際委員会
——Non Governmental Organizationとしての考察——
——慶應義塾大学(大学院修士課程) 郭 祐子氏
 - 6 D・ヒュームのイギリス史解釈について
——慶應義塾大学(大学院後博士課程) 郭 海良氏
- 民族学・考古学部会(九・〇〇～一二・三〇) 西校舎五一六番教室
- 1 縄文時代の植物質食料
——特にエゴマについて——
 - 2 弥生編年にもみられる埋葬様式方向について
 - 3 燧石器製作を問題としたケムシ研究
——慶應義塾大学(大学院修士課程) 佐藤 孝雄氏
 - 4 近世における埋葬儀礼の考古学的検討
——慶應義塾大学(大学院修士課程) 奈良 貴史氏
 - 5 ポリネシア社会における分岐的進化の過程
——フトウナとウェブアの場合——
——慶應義塾大学(大学院修士課程) 山口 龍氏
 - 6 ヌシタギに見られる契約書の姿遣
——慶應義塾大学(大学院修士課程) 牧野 久美氏
- 総合部会(一二・三〇～一七・〇〇) 西校舎五一七番教室
- シンポジウム「地中海世界と宗教」
- 1 懇話1 諸宗教の普遍性をめぐって
 - 2 懇話2 文明の移転をめぐって
- ロマンテーター
- 総合司会 湯川 武氏

懇親会(一七・三〇～一九・三〇)三田山上「山食」にて



シン・ポジウム「地中海世界と宗教」 提題要旨

提題1 「諸宗教の重層性をめぐって」

坂口 昂吉

一般に宗教は、個人的カリスマをもつ教祖に端を発し、教団組織の制度化、典礼儀式の固定化、教義の体系化へ進み、正統派を形成する。他方、かかる客観的的制度として樹立された正統派から分離し、最初の個人的・主観的カリスマを再興すべく異端分派や神秘主義者が発生し、それがまた一定の教派に固定していくのが常である。西欧キリスト教にみられる現象はまさにその典型である。古代末における原始キリスト教から中世のカトリック教会の確立、近代における宗教改革以後のプロテスタント諸教派の分離と定着がそれである。ただプロテスタント諸教派が根を降ろしえたのは、北欧と新大陸のみであった点に問題がある。後のユニテリアンの元祖ソッチーニ主義などはイタリアに発生しながら当地では消滅してしまった。またキリスト教の中心が地中海世界にあった古代末から十五世紀まで、そこでは無数の異端分派や神秘主義が発生しながらも総べてカトリック教会に同化吸収され、対立教派を形成するに至らなかった。この原因の一つは、地中海世界における諸宗教の重層性ないし併存のうちに求めうるのではない。そこにおいてキリスト教はユダヤ教の分派として成立し、伝統的なギリシア・ローマの諸宗教と併存した。さらに七世紀以降、イスラム教がユダヤ教の分派としてキリスト教の影響をも受けつつ成立すると、地中海世界は三大宗教併存の場となった。またカトリック教会とギリシア正教会は中世において分離傾向を強めながらも、相互交流を絶ちはしなかった。異なった諸宗教との重層ないし併存関係におかれたカトリック教会は、他の宗教的諸要素を絶えず批判的に摂取し、文字通り「対立の綜合」であった。このことが自らの中より生ずる異端分派や神秘主義をも吸収同化する弾力性を正統派に与えたと考えられる。古代末のドナティスト異端、中世盛期の清貧運動に例をとって考察してみたい。

提題2 「文明の移転をめぐって」

三木 亘

地中海世界は古来多くの文明が興亡し、さまざまな文明の出逢いが行われた場である。当然そこでは文明移転の問題がおこる。

ここでは、ふたつの文明移転のかたちを考えてみたい。ひとつは、後発文明が先行文明をその担い手である人びとや土地もろとも引継ぐかたちであり、いまひとつは、後発文明が先行文明の外部に展開し、外から先行文明の諸要素を吸収移転するかたちである。

第一類型としては、古代ギリシア文明に対するローマ文明の場合、および、広義のヘレニズム文明に対するアラブ・イスラム文明の場合、があげられる。前者の場合はいうまでもないが、後者の場合も、広義のヘレニズム文明がもつとも蓄積していたシリア、エジプトを、土地、人民もろともそっくりアラブ・イスラム文明が引継いだのである。この文明は同時に東方でも、ササン朝のイラン文明をそっくり引継いでいる。

この第一類型では、後発文明が先行文明を次第に統合してゆくが、その統合の程度はさまざまである。ローマ文明は古代ギリシア文明をあまり統合しきれず、東地中海ではギリシア語が終始持続しつづけた。これに反しシリア、エジプトは、ほぼ完全にアラブ化、イスラム化された。しかし東方のイランは、イスラム化はされたがアラブ化はされなかった。もっともペルシア語はその語彙のなかば近くをアラビア語から受取った。

第二類型としては、古代オリエント文明に対する古代ギリシア文明の場合、および、アラブ・イスラム文明に対する西欧文明の場合、があげられる。いずれの場合も、外からの吸収移転で、当然移転される文明要素は選択的であり、また、移転過程が同時にその文明要素の変容過程でもある。移転された文明要素はもとのもののヴァージョンであって、コピーではない。